

対称空間上のEisenstein積分とその応用
-対称空間 G_c/G 上のPlancherel公式-

職業訓練大 佐野 茂

§ 序

G_c を Harish-Chandra 類の複素可約リー群、 τ を G_c の対合的自己同型写像とする。 G_c^τ を τ により不変な元全体よりなる部分群とし、 (G_c^τ) をその単位元を含む連結成分とする。 G を (G_c^τ) 、 $G \subset G_c^\tau$ なる部分群とすると、 $[G: G_0] < \infty$ を満足。 G_c の Cartan自己同型写像 θ で $\theta\tau = \tau\theta$ 、 $\theta(G) = G$ を満足するものをとる。

\mathfrak{g}_c を G_c に対応する複素可約リー環、また \mathfrak{g}_c 上の対応する対合的自己同型をそれぞれ同じ記号 τ, θ で表す。 τ による固有空間分解を $\mathfrak{g}_c = \mathfrak{g} + \mathfrak{q}$ 、そして θ による固有空間分解を $\mathfrak{g}_c = \mathfrak{l} + \mathfrak{p}$ とする。 G_H を G_c の複素化とし、そのリー環を \mathfrak{g}_H とおく。 \mathfrak{g}_H における \mathfrak{g}_c の双対を $\mathfrak{g}_c^d = \mathfrak{l} \cap \mathfrak{g} + i(\mathfrak{l} \cap \mathfrak{q}) + i(\mathfrak{p} \cap \mathfrak{g}) + \mathfrak{p} \cap \mathfrak{q}$ 、随伴を $\mathfrak{g}^d = \mathfrak{l} \cap \mathfrak{g} + \mathfrak{p} \cap \mathfrak{q}$ ($i = \sqrt{-1}$) とおく、また \mathfrak{l} の双対を $\mathfrak{l}^d = \mathfrak{l} \cap \mathfrak{g} + i(\mathfrak{p} \cap \mathfrak{g})$ とおく。 K を \mathfrak{l} に対応する G_c の極大コンパクト部分群とする。 K^d, G_c^d を $\mathfrak{l}^d, \mathfrak{g}_c^d$ に対応する G_H の解析的部分群とする。

以下の § では対称空間 $X = G_c/G$ 上で考える。この対称空間は可約リー群 $G \cong GXG/G$ の実質的な意味で双対な空間と考えられる。すなわち、離散系列表現と連続系列表現において双対な現象がある。§ 1 では連続系列表現と、対応する X 上の不変帯球超関数を与える。§ 2 では離散系列表現もこめて一般の主系列表現を扱う。§ 3 においては Eisenstein 積分の概念とその constant term を議論し、§ 4 では Plancherel 公式を考える。

§ 1. 連続系列

対称対 $(\mathfrak{g}_c, \mathfrak{g})$ はこの § では split Cartan 部分空間 \mathfrak{a} をもつとする。対応する極小放物的部分群を $P = MAN$ ($MA = Z_{G_c}(\mathfrak{a})$ 、 $A = \exp \mathfrak{a}$) とおく。 GP は G_c の開部分集合である。Poisson核 $\exp_H(\mathfrak{g})$ を $g^{-1} \in GM \exp_H(\mathfrak{g})N$ 、 $\exp_H(\mathfrak{g}) = 0$ ($g^{-1} \notin GP$) で定義する。 \mathfrak{a}^* を \mathfrak{a} の双対とし、 \mathfrak{F} を $i\mathfrak{a}^*$ における W による1つの Weyl 領域とする。 G 上の Haar 測度 dg 、 X 上の G_c -不変な測度 $dx = d(gG)$ を与えて、 X 上の不変帯球超関数を

$$\Phi_\lambda(f) = \int_{\mathbf{X}} \phi_\lambda(x) f(x) dx \quad (f(x) \in C_c^\infty(\mathbf{X}))$$

但し

$$\phi_\lambda(x) = \int_G \exp(\rho - \lambda) H(hx) dh$$

で定義する。 W を $(\mathfrak{g}_c, \mathfrak{a}_c)$ の Weyl群、 W_G を G の A への内部自己同型よりなる Weyl群 $W_G = N_G(A)/Z_G(A)$ とする。 $\underline{W} = W/W_G$ とおき、そこでの和より不変帯球超関数 $\Theta_\lambda = \sum_{w \in \underline{W}} \Phi_{w\lambda}$ を定義する。 \mathbf{X}' と \mathfrak{F}' をそれぞれ \mathbf{X} と \mathfrak{F} の正則な元全体からなる部分空間とする。

命題1.1 Θ_λ は $A' (= A \cap \mathbf{X}')$ 上解析関数となり、 $\lambda \in \mathfrak{F}'$ に対し次式が成立

$$\Theta_\lambda|_{A'} = \frac{\pi(\rho) \sum_{w \in \underline{W}} \varepsilon(w) e^{w\lambda(x)}}{\pi(\lambda) \Delta(\exp X)} \quad (X \in \mathfrak{a})$$

但し、 $\pi(\rho) = c(\lambda) \pi(\lambda)$ 。

\mathbf{X} 上の関数 $f(x)$ に対し G で積分して $f(x)$ と一致する G_c 上のコンパクトな台をもつ関数を $f_0(g)$ とする。また、 G_c 上の関数 $h(g)$ に対し $\hat{h}(g) = \text{conj } h(g^{-1})$ とおく。

命題1.2 \mathbf{X} 上の C_c^∞ -関数 $f(x)$ で $\text{supp } f \subset G[A]$ を満足するものは

$$\int_{\mathfrak{F}'} \Theta_\lambda(f_0 \hat{h} * f_0) |\pi(\lambda)|^2 d\lambda = \int_{\mathbf{X}} |f(x)|^2 dx$$

が成立。

最初の仮定より可約リー群 G は幾つかの離散系列をもつが、この結果よりその離散系列の系列数と G_c/G の連続系列の重複数は一致することが分かる。

§ 2. 一般の主系列

$\Pi = \{j_1, j_2, \dots, j_m\}$ を $K\mathfrak{N}G$ で互いに共役とならない \mathfrak{q} の Cartan 部分空間の極大系とする。各 j_l ($l=1, 2, \dots, m$) に対して $\mathfrak{b}_l = j_l \cap \mathfrak{t}$ 、 $\mathfrak{a}_l = j_l \cap \mathfrak{p}$ とおく。 j_l に対応する放物的部分群 P_l を $P_l = M_l B_l N_l$ ($M_l B_l = Z_{G_C}(\mathfrak{b}_l)$) とおく。 GP_l が $G \setminus G_C$ の閉軌道のときは離散系列に、そして開軌道のときは連続系列に対応する。 M_l は Harish-Chandra 類の τ -不変な可約リー群となり、 $M_l/M_l \cap G$ は連続系列をもつ対称空間となる。 \mathfrak{m}_l を M_l のリ一環とし、 $(\mathfrak{a}_l, \mathfrak{m}_l)$ より与えられる Weyl 群を W^* とする。 $i \mathfrak{a}_l^*$ の W^* による1つの Weyl 領域を \mathfrak{F}_l とし、 $\lambda \in \mathfrak{F}_l'$ にたいし、 $\theta^{\lambda, \omega}$ を §1 で与えた $M_l/M_l \cap G$ 上の不変帯球超関数とする。 GP_l 上の Poisson 核 $\exp U(g)$ を $g^{-1} \in G_C \setminus G_C$ ($m(g) \in M_l \cap G \setminus M_l$ 、 $\exp U(g) \in B_l \cap G \setminus B_l$)、 $\exp U(g) = 0$ ($g^{-1} \in GP_l$) で定義する。 $B_l \cap G \setminus B_l$ の離散系列表現を、 \mathfrak{b}_l^* の lattice でパラメータ ω を与えよう。このとき、 X 上の不変帯球超関数 $\theta^{\lambda, \omega}$ を

$$\theta^{\lambda, \omega}(f) = \int_{\mathfrak{X}} \theta^{\lambda, \omega}(x) f(x) dx \quad (f(x) \in C_c^\infty(\mathfrak{X}))$$

但し

$$\theta^{\lambda, \omega}(x) = \int_G \theta^{\lambda, \omega}(m(hx)) \exp(\rho - \omega)U(hx) dh$$

で定義する。 W_C^l を $W_C^l = N_G(j_l)/Z_G(j_l)$ とおく。 W_l を (j_l, g_C) の Weyl 群とし、 W^* と W_C^l とを W_l に自然にうめこみ張られる部分群を W_l^* とする。ここで、 $\Sigma(j_l)$ の虚ルートより与えられる Cayley 変換と $K\mathfrak{N}G$ の作用で j_l より移る Cartan 部分空間の系列を $\Pi_l = \{j_l, \dots\}$ ($\subset \Pi$) をとる。 J_l を j_l に対応する X の Cartan 部分空間とする。このとき

命題 2.1 $\theta^{\lambda, \omega}$ の $J_l \cap G \setminus J_l'$ 上の解析関数は

$$\theta^{\lambda, \omega} \Big|_{J_l \cap G \setminus J_l'} = \begin{cases} \frac{\pi(\rho) \sum_{w \in W_l^*} \varepsilon(w) e^{w(\lambda, \omega)(x)}}{\pi(\lambda, \omega) \Delta(\exp X)} & X \in j_l \\ 0 & X \in j \quad (j \in \Pi \setminus \Pi_l) \end{cases}$$

となる。

§ 3. Eisenstein 積分

§ 2 の記号を用いる。放物的部分群 $P_l = M_l B_l N_l$ に対して Eisenstein

積分を次のように定義しよう。 $\varphi \in C^\infty(M_L/M_L \cap G)$ を $\varphi(hwnam) = \varphi(m)$ で拡張し、 $g \in G_C$ にたいし $g \in Gw(g)N_L B(g)M_L (B(g) \in B_L \cap G \setminus B_L, G_C = \cup_w GwP_L^{-1})$ により $B(g)$ を与える。このとき

$$E(P_L : \varphi : x) = \int_G \alpha(h) \varphi(xh) \exp(\rho - \omega) B(xh) dh \quad \alpha \in C_c^\infty(G)$$

とおく。

次に対称空間上に constant term の概念を考える。 $P = M_L B_L N_L$ に対してその双対を $P^d = M_L^d A_L^d N_L^d$ とおくと、 $M_L^d \cong M_L$ 、 $N_L^d \cong N_L$ 。次の空間

$$C^\infty(P^{-1}/G) = \{ f \in C^\infty(X) : \text{supp } f \subset P_L^{-1}/G \}$$

$$C^\infty((P^d)^{-1}/K^d) = C^\infty(G_C^d/K^d)$$

において、対応を考える

$$\eta : C^\infty(P^{-1}/G) \stackrel{\text{local}}{\cong} C^\infty((P^d)^{-1}/K^d) : f \rightarrow f^*$$

また、 M_L 上における対応を η_L で表す。 $f \in A(X)$ に対し $M_L/M_L \cap G$ 上の constant term を

$$\lim_{\substack{a \rightarrow \infty \\ P^d}} \{ d_{P^d}(am) f^*(am) - f^*_{P^d}(am) \} = 0$$

を用いて $f_P = \eta_L^{-1}(f^*_{P^d})$ で定義する。このとき

命題3.1 b を compact part にもつ放物的部分群を P, P' とすると

$$E_{P'}(P : \varphi : bm) = \sum_{s \in W(b)} (c(s, \omega) \varphi)(m) e^{s\omega(\log b)}$$

を満足する定数 $c(s, \omega)$ が存在。

§ 4. Plancherel 公式

この§では§2で与えた主系列表現の不変帯球超関数 $\theta^l_{\lambda, \omega}$ を用いて Plancherel 公式を考える。放物的部分群 $P_L = M_L B_L N_L$ に対する不変帯球超関数 $\theta^l_{\lambda, \omega}$ は Eisenstein 積分に次ぎの様に対応する。

命題4.1 $\lambda \in \mathcal{F}_L, \omega \in (B_L/B_L \cap G)^\wedge$ に対して

$$\langle \theta^{\lambda, \omega}, l(x)f \rangle = E(P_l : \varphi_f : x)$$

但し

$$\varphi_f = \int_{M_l/M_l \cap G} \int_{N_l \times B_l/B_l \cap G} \theta^{\lambda}(m) \exp\{(\omega - \rho)(\log b)\} f(nbm \cdot m) \, dn db^* dm^* \\ (xh = h \circ wn \circ b \circ m \circ m_0)$$

が成立。

適当に測度を正規化すると次の形でPlancherel公式を得る。

定理4.2 $f \in C_c^\infty(X)$ に対し

$$\int_X |f(x)|^2 \, dx \\ = \sum_{l=1}^m \int_{\omega \in (\hat{B}_l/B_l \cap G)^\wedge} \int_{\mathcal{F}_l} \langle \theta^{\lambda, \omega}, f \circ \hat{*} f \rangle |\pi(\lambda, \omega)|^2 \, d\lambda$$

が成立。

証明の方針。各不変帯球超関数 $\theta^{\lambda, \omega}$ を命題4.1によりEisenstein積分に、そしてconstant termをとることにより $M_l/M_l \cap G$ 上の議論に帰着させる。ここでは、命題1.2が成立するが、関数空間を各放物的部分群により分解し、各Cartan部分空間に対応する表現系列ごとに逆フーリエ変換を求める。これを合わせることで公式を得る。

-文献-

- [1] Harish-Chandra: (1) Harmonic Analysis on Real Reductive Groups I, J.Func.Anal. 19(1975), 104-204,
 (2) Harmonic Analysis on Real Reductive Groups II, Invent. Math. 36(1976), 1-55,
 (3) Harmonic Analysis on Real Reductive Groups III, Ann. of Math. 104(1976), 117-201.
- [2] 大島利雄: 半単純対称空間上の調和解析、数学、37(1985), 97-112.
- [3] Sano.S: (1) Distribution sphériques invariantes sur l'espace semi-simple et son c-dual, Lecture Notes in Math. No.1243, Springer(1985), 283-309.

(2) Une intégral invariante sur l'algèbre de Lie symétrique semi-simple, *Advanced Studies in Pure Math.*, 14 (1988), 449-517.

(3) 対称空間の Eisenstein 積分, *Seminar Reports of Unitary Representation*, 8 (1988), 99-108.

(4) Distributions sphériques invariantes de la série discrète sur l'espace symétrique semi-simple réel G_C/G_R . *Sci. Papers College of Arts and Sciences, Univ. of Tokyo*, 39 (1989), 57-71.